

国防も神々と共にあるべきです

我が国を、これだけ永い歴史の中でも守り抜いてこれたのは、神代からの武闘神の働きもあるでしょう。そのような神々と今の自衛隊が無関係なものになってはいけない、と明治神宮の武道場「至誠館」元館長・荒谷卓氏は訴えます。

武道家であり、26年間陸上自衛隊に所属し、特殊部隊「特殊作戦群」の初代群長を務め、退職後は明治神宮の武道場「至誠館」館長だった荒谷卓氏。

現在は、三重県熊野市飛鳥町に「国際共生創成協会熊野飛鳥むすびの里」を設立し、稲作を中心とする「農」と、日本の歴史や神話を学ぶ「教学」と「武道」を三本の柱として、日本の国を守るコミュニティ作りに取り組んでいます。

神棚マイスター・窪寺伸浩氏が、今回荒谷氏に伺ったお話の中で驚き嘆いたことの一つが、かつては自衛隊の全国の駐屯地に鎮座していた神社が全廃されており、「政教分離」のために神棚を祀ることすらできないという事実でした。

「二十数年以上前、私が特殊作戦群を組んでいた頃は、道場もありましたので、鹿島神宮の宮司様にきていただき、祭祀も執り行ない、立派な神棚を祀っていました。私の群長室にも大きな神棚がありました。し

かし、監察が来る度『この神棚を外しなさい』と注意されてもいました。でも、私は全て無視したのです。処罰をくらったことはありませんが……。でも今の特殊作戦群では、もうどうなっているかわかりません」と荒谷氏。

「自衛隊の駐屯地であつて、隊員を駐屯地内の神社にお祀りしたことによって、遺族から裁判で訴えられました。それに過剰反応した、当時の防衛事務次官が全国の駐屯地の神社を廃止するよう通達を出したのです。例えば、市ヶ谷の駐屯地内には四、五社の神社が鎮座していましたし、全国の駐屯地に神社があつたのです。しかし、事務次官の通達一本で全て撤去されたのです」

神様にご相談しながら生きてきた日本人

「日本の防衛組織の、駐屯地の神様を全て撤去してしまうということは、いろいろな意味で歴史の断絶と

なってしまう。我が国を、これだけ永い歴史の中で守り抜いてきた祖先を神と崇め、その精神の継承と、今の自衛隊が無関係なものになってしまうのです。『民主主義』の軍隊とか言われていますけれど、そんな外来の観念でお国を守るわけではないのです」と荒谷氏は訴えます。

「神棚や神社が育む『和』というものは、単に今を生きている人たちだけが仲良くする『和』というものではありません。共に生きる『和』を育む日本の文化の根本は万物万象一元であるという意識です。『神様を辿っていくと全てが一体なのだ』という宇宙創始から未来に至るまでの縦の『和』が理解できるのです。その縦の『和』、歴史の『和』をベースにして、そこから横の『和』というものを考えていくということなのです。」

本当の『和』の尊さというものは、神様を基軸にして考えた時、腑に落ちるといふ面があります。だからこそ、日本人は人々が集う場所で神棚をお祀りしてきました。

日本においては、現世の我々が隠り世の神様と、どうやったら良い世の中になるか、ということをお伺いし相談する、そういったスタイルを取っているのです。つまり一神

教のような絶対的な神に服従するという構造ではなく、神というもの認識が、私たちとすぐく一体化しているのです」

荒谷氏がとても腑に落ちたということに、「武」という言葉の由来があります。神武天皇の「武」を「む」と読むように、「むすひ（産霊）」の「む」から来ているのだそうです。ですから本来、「武」とは、神皇産かみみすひ霊たま神様、高皇産霊たかみむすひのかみ神様の「産霊」の生成作用を荒魂をもって具現するものだったのです。

日本の歴史や神話にも造詣が深い荒谷氏。次号では神棚マイスター・窪寺氏が、日本の国を守るといふことは、どういうことなのか？ 等々じっくりとお伺いします。



荒谷卓氏